

《タッタッタ》

(駆ける足音)

ノラを探し夜の道を駆ける貴方。

仮にも自分の根城としている場所の周辺なのだ、彼女が行ける範囲ならば探すのは決して難しくは無いはずである。

そう信じ、探し続けている、と奇しくも彼女と出会ったあの路地裏の近くまで通りかかった所で、

ノラ

「おい、止めろ！ 放せ……放せ……！」

親父

「うるせえ！ 黙ってついてこいっ！」

勝手に逃げ出しやがって……立場ってのを、教えてやるからなあ！」

路地の奥から聞こえてくる、探していた少女の声と、見知らぬ男の声。

聞こえた瞬間、貴方は猛る思いの勢いそのままに、声の下（もと）へと足を急がせる。

そしてその間にも、2つの声は路地の奥から貴方の耳に響いてくる。

ノラ

「放せてんだよ、このクソ野郎がっ！！」

なんだよ、なんだよ……なんなんだよっ！！

テメエが、謝るっていうから付いていってみれば……何なんだよあの場

所はっ!？」

親父

「うるせえ、黙れ黙れ黙れ!!」

お前をあの場合に連れて行くつてのは、もう決まったつて言つてあつた
だろうがよお!!

お前が逃げたせいで、おらあ違約金だなんだつて、金を貰うどころか、
金を取られそうになつたんだぞ!？」

全部、全部オメエが悪いんだ……オメエが、逃げたりなんかするからわ
りいんだよお!!」

《バシンツ》

(親父がノラを殴る音)

《ドサツ》

(ノラの倒れる音)

ノラ

「がっ!？ あぐ……う、つう……。

く、ひつく……ふぎ、けんな……ふぎけんなよ、クソ野郎……っ。

オレはあ、オレはあ……あんたが、あんたがよお!

ぐすっ……昔、みたいに、少しでもなつてくれたんだつて……信じて、
信じて……っ」

親父

「へ、へへ……しらねえな、しらねえよ、そんなもんっ！！

お前のお陰でおらあ酒が飲める、お前はおれに恩返しができる……ええ？

これ以上の良い事なんざ、何もねえだろうがっ！

どうせ置いておいたって……おめえも、いつかいなくなるんだろが……今回みたいにつ！

だったら、少しでもおれの徳になるように別れて、何が悪いってんだあっ！！」

ノラ

「つつつつ！！

ふ、ざ……けんなあっ！！

オレが、オレがどんな思いでテメエの所から出てったと思ってんだっ！！

クソ、クソ……なんで、なんでそんなになっちまったんだよお……っ」

親父

「へ、へへ……知った事かよ、おらあもう、何もかもどーでもいいんだあ……。

ひひ、ああそうだ……また逃げられちゃたまらねえかよ。

ここだなあ……おい？ 一つ、男に逆らうとどうなるかっての、教え込んでやった方がいいかもなあ！」

《しゅる……ぱさっ》

(ズボンを脱ぐ音)

ノラ

「へ……？」

何言って……おい、おい……嘘だろ？ 何脱いで……！？

て、てめえ正気かよ！？ オレが、テメエの何か分かってやってんのかよ、おい！？

酒でそこまでイカれちゃったのか！？」

親父

「へへへ……全部、全部逃げるやつが悪いんだよお……へへへ。

ほおら、これが男のモノだぞお？ お前がこれから毎晩口にもアソコにも咥えるもんだあ、へへ！

ほれえ、まずは口からだあ。オレがくれてやれる最後の教育つてもんだあ、しっかり味わえよお……ひひっ！」

ノラ

「おま、ふざけ……ひっ！？

やだ、やだ……っ！？ そんなもの近づけるなっ！！

ひぐっ、う……臭いが、鼻に……うぐっ！？

やだ、やめろ、やめてくれて……くさ……ひうっ！？」

親父

「ほれえ、よく嗅げえ？

ひひひ、たつぷり馴染ませて店で粗相（そそう）しないように教育してやるからよお！

おら、匂いを嗅ぐだけじゃなくて、次は口だって言ってるだろ……ほれ、開けろ、開けろってえ！」

ノラ

「むう、むう……う、や、らあ……やだあ……ぐす、ひつく……う、あ……

たすけて、だれかあ……やだよお、ぐす。

こんなの……やだあああああつっ！！」

《どごんっ！！！！》

（貴方の拳が、男を弾き飛ばす音）

貴方が路地の奥についた時には、ノラの鼻先に薄汚い男のイチモツが突きつけている最中であつた。

その瞬間、貴方の頭は真っ白になる。

町の中だとか、人を安易に殺めてはいけないなどという理屈は何処かに吹き飛び、冒険者として鍛えた膂力でもって全力で、男を壁まで殴り飛ばした。

親父

「ひげえっ！？　がつ、ぐえ……いでえ、な……なんだあ？」

《ごんっ！ばきっ！ごすっ！どすっ！！》

親父

「ひぐつ！？　ぐえつ、がつ！？

ぎい、いぐつ……ぶつ、うつ……お、おぶうつ！？」

下半身を露出させたままの男が、何が起きたのか分からず身を起こそうとするが、それを貴方は許さない。

言葉を吐き出す間（ま）も与えぬとばかりに、壁に弾きとんだ男へ怒りのままに何度も、何度も、拳を振り上げ、振り下ろす。

親父

「ぎぶつ！？　ぐつ、ぶえつ……いぎ、が……ひぎやうつ！？

ぐ、が……ぶお……ぐつ、げほおつ！？」

男は何の抵抗も出来ずに、貴方の拳をめり込ませて体をくの字に曲げて悶絶する。

顔は痣で腫れあがり、吐き出す唾液には赤い血の色が混じり始めるが、それでも……貴方は拳を止めるつもりにはなれなかった。

ノラを、彼女を最悪の形で傷つけようとした。

その怒りが、拳を止めるという選択肢を貴方から奪い去っていたのだ。

親父

「がつ……ひゅ、……かひ……あ」

もはや体を動かす事すらままならない様子の男を冷たく見下し（みおろ

し)ながら、貴方はトドメの一撃を加えるべく大きく腕を振り上げ
……。

ノラ

「ダメエ!!!!」

《ぎゅうっ!!!》

(ノラが抱きしめる音)

振り下ろす瞬間、ノラが悲痛の叫びと共に貴方に向かって抱きついた。
顔を涙でぐしゃぐしゃに汚し、怯えに瞳を濡らしながら、それでも彼女は貴方が拳を振り下ろすのを許してくれない。

ノラ

「ごめっ……ひっく、ごめ……ありがとう、ありがとう……ぐすっ
でも、でもダメ……止めて、ぐすっ……それをやったらこいつ死んじや
う。

死んじやうよお……やだよお、やだぁ……」

確かに、ノラの目の前で人が死ぬのは良いことではない。

だが、こんな男を放っておけば、いつまた彼女に被害が出るかも分からないのだ。

【頼むから、止めないでくれないか?】

怒りに震える声で、それでも出来る限り泣きじやくる少女に優しく声をかける貴方。

けれど、それでも少女は涙ながらに首を横に振る。

ノラ

「ダメなんだ、ダメなんだよお……！」

おっさんの、気持ちは……すげえ、すげえ嬉しい……ぐすつ。

でも、でも……こいつ、こいつ……」

涙で崩れているノラの顔が、余計に歪む。

言いたくない事を、どうしても言わねばならないというように。

そして、意を決したのか、ポロポロと流れ続ける涙を拭いてもせずに、真っ直ぐ貴方の瞳を見て、懇願する。

ノラ

「親父なんだあ……！」

オレのお、親父なんだよ……こいつっ！

こんな、クソ野郎だけど……オレのお、親父なんだよお……っ！

だからお願い……ぐすつ。ころさ……ないでえ……っ！

うつ、あ……う……うう……うわあああああっつ」